

レポーター：学芸員の渡拔さんです。よろしくお願いします。

学芸員：よろしくお願いします。

レポーター：こちらの作品はどういった作品になるんですか。

学芸員：この作品は、吉田博の制作した溪流という作品でして 1910 年に吉田が 34 歳の頃に描いた作品になります。

レポーター：吉田博さんってどういった方なんですか。

学芸員：吉田博はですね、1876 年に福岡県の久留米市で生まれた作家さんなんですね。

明治・大正・昭和と 3 代にわたって水彩画や油彩画やあと木版画など 3 つの作品の分野に限ってなんですけど、特質的画業を示した画家という風にいられています。

レポーター：その時代に何かそのこの絵って特徴があるんですか。

学芸員：明治美術界というのが当時、あのこの時代の中では象徴的なもので、当時の作家さん 80 人くらいいるんですけども、その作家さん全員がほとんど明治美術会というものに所属していたんですね。なんですけど、黒田清輝がフランスから留学で戻ってきてそのあとに、白馬会というものを立ち上げるんですけど、そのときにあのこの吉田博も対抗して太平洋画会というものを創立する、でそういったものを行ったんですね。はい。

レポーター：その対抗し始めた頃の作品っていうような形になるんですか。

学芸員：その対抗してもう何年か経っているんですけども、この作品自身が初期の吉田の中でも最高傑作といわれても、まあいいんじゃないか、遜色ないのではないかといい風には考えていますけど。

レポーター：これはどういった場所を描いている作品になるんですか。

学芸員：それについては、いろいろな方からの質問があったりするんですけども、不明なんですね。はい。ただ吉田自身が、もともとなんか大の登山好きというか、渓谷とか山をモチーフにして作品を描くという事がとても多かった作家さんでもあって、この吉田博本人も、あの小高い岳、烏帽子岳とか、剣岳とか、なんか上級者レベルの登山家が臨むような、そういう山に登って、その場で絵を描くというような事をしてたっていう方なんですね。ほんとにストイックな人で。吉田自身が渡米してそこでまあ絵の展覧会をしていくという時期などがあるんですけど、ある日の時にそのクリーブランドの新聞記者の取材を受けているんですね。でその時に、自然の絵を描くのが必要ならば、寒さの中に自分を通して、精神的にも合わせなければいけないという、かなり厳しいそのストイックな気持ちというか、そういったものが、こういう作品としても昇華されていったんだろうなというふうに考えております。

レポーター：実際にこの作品を見るときに、例えばこういうところが面白いよとか、こういうところにポイントがあるんだよっていうところはあるんですか。

学芸員：そうですね。この作品自身、写実的な作品でもあるんですけども、例えば、水の中に岩が沈んでいる状態とか、あとはそういう、こういう水の透明度がわかる様な感じもありますし、左側の方でも静かな水の上にこういう岩が映りこんでいるような鏡としての様子という風もあります。水自身がこっちの方で動きが緩やかなものに対して、急に激しい動きを見せてくるような、こういった静と動の動きというもの、この岩の荒々しいタッチとその水との関連性というのがすごく見事な表現としてされているんだろうというところが見所ですよ。

レポーター：そうですね。パッと見、力強さだけかなという感じにも、細かいところを見ていくとほんとにバランスのとれた作品なんですね。

学芸員：そうですね。ええ。

レポーター：じゃあ細かいところもじっくりと見ていくとまた楽しさが伝わってきますね。

学芸員：はい。そういう意味にも是非見に来て頂けたらなあと思っております。

レポーター：ありがとうございました。

学芸員：ありがとうございました。